

大阪男声合唱団 / 東京甲陵会合唱団
大阪外国語大学グリークラブOB合唱団
賛助出演 vie Souple

Chorus!

ジョイントコンサート
コーラスの
玉手箱

2018年 10月14日(日) 江東区文化センター

後援: 東京都合唱連盟

ごあいさつ

本日は、「ジョイントコンサート コーラスの玉手箱」にご来場いただき、誠にありがとうございます。大阪男声合唱団、大阪外国語大学グリークラブOB合唱団、東京甲陵会合唱団という関西の大学の在京OB合唱団による初めてのジョイントコンサートの試みです。この3団には、関西の大学の在京OB合唱団という共通点に加え、今回のコンサートの合同ステージで指揮をお願いしている小貫岩夫先生という共通点もあります。小貫先生は、大阪外国語大学グリークラブOB合唱団の常任指揮者、東京甲陵会合唱団のヴォイストレーナー、そして、大阪男声合唱団でも過去に東京支部のヴォイストレーニング指導に関わられたことがあり、3団とも小貫先生の指導を受けているという共通点です。

今回のジョイントコンサートには、女声合唱団vie Soupleの皆様が賛助出演をしてくださいます。一昨年、東京都合唱祭でvie Soupleの澄み切った素晴らしいコーラスを聴く機会に恵まれた大阪外国語大学グリークラブOB合唱団のメンバーが、今回のジョイントコンサートへの出演を懇願し、実現したものです。

最初のステージでは、大阪男声合唱団が漫画家やなせたかしの詩に木下牧子が曲をつけた男声合唱による10のメルヘン『愛する歌』より6曲を、続く第2ステージでは、大阪外国語大学グリークラブOB合唱団が日本人にも馴染みのあるロシア民謡5曲を、第3ステージでは、vie Soupleが無伴奏女声合唱による日本名歌集『ノスタルジア』より「村の鍛冶屋」など5曲を、第4ステージでは、東京甲陵会合唱団が男声合唱組曲『光る砂漠』より5曲を演奏いたします。そして、合同ステージでは、60名を超える大合唱で、高野喜久雄作詩、高田三郎作曲の組曲『水のいのち』より4曲を小貫先生の指揮で演奏します。『水のいのち』は50年以上にわたって歌い続けられた名曲で、単に水の一生を叙情的に描いた歌ではなく、私たちが「いのち」として持つべき精神のあり方の一つを示そうとした曲といえます（曲目解説をご参照ください）。

各団がそれぞれ趣の異なるステージを展開し、最後に大合唱でコンサートを閉じる、まさに「コーラスの玉手箱」にふさわしい演奏会をお楽しみいただければ幸いです。

コーラスの玉手箱実行委員会

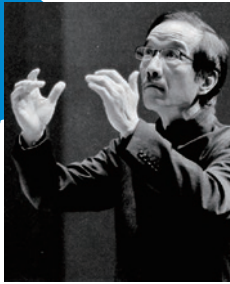


コーラスの玉手箱コンサート。この素敵な名前のコンサートが実現したことを心より嬉しく思います。何故なら、そのキッカケに少しでも関わっているから…。でもそんなことは大したことではなく、男声合唱を愛する男たちが一堂に会し、それぞれの個性を發揮し、そして共に歌う。その情熱が何より素晴らしいと思います。そしてそんなおじさんたちに、嫌な顔せずにつき合ってください若いvie Soupleの皆様が、この会の一服の清涼剤となることは間違いないでしょう。コンサート実現のために尽力くださった全ての方に、そしてご来場のお客様に、心から感謝いたします。

小貫 岩夫 *Iwao Onuki*

北海道出身。同志社大学時代、同志社グリークラブに所属。その後大阪音楽大学卒業。文化庁オペラ研修所第11期修了。数々のコンクールで優勝・入選。95年「魔笛」タミーノ役に抜擢され、テオ・アダムと共演しデビュー。翌年ドイツ・ケムニッツ市立歌劇場より招聘を受け同役で出演。98年より文化庁派遣でミラノへ留学。2000年新国立劇場デビュー。2001年5月より大阪で、その後2010年からは大阪と東京で毎年ソロリサイタルを開催している。2013年には天皇皇后両陛下御親覧の舞踏会で御前演奏を行い、お言葉を頂いた。二期会会員。

指揮

**甲和 伸樹** *Nobuki Kowa*

1977年大阪大学入学と同時に男声合唱団に入団、在学中にはパートリーダー及び技術委員長、その後OB合唱団である大阪男声合唱団の副指揮者を約3年務めた。東京に転居直後の10年間は合唱から離れたが、2001年大阪男声の東京練習開始を機に練習指導に携わり、以降は定期演奏会、東京支部単独演奏、他合唱団との合同ステージなどを指揮。居住地近隣の合唱団の運営や技術スタッフとしても活動の幅を拡げている。

**坂井 美樹** *Miki Sakai*

大阪音楽大学音楽学部声楽専攻首席卒業。大阪音楽大学大学院オペラ研究室修了。摂津音楽祭で大阪21世紀協会賞、銀賞を2年連続受賞。97年、「ワルキューレ」のオルトリンデ役で関西二期会にデビュー。同年、「金閣寺」の「女」役が好評を得る。99年、ミラノに留学。その後、数々のオペラに出演。また桂小米朝（現5代目米團治）とともにオペらくご「背広屋の利発な結婚」にも出演。コンサート活動も精力的に行っている。二期会準会員。

**石井 奈央** *Nao Ishii*

慶應義塾大学卒業。国立音楽大学音楽学部演奏学科声楽専修卒業。声楽を、波多野睦美、田中淑恵、各氏に師事。指揮法を、今村能、森垣桂一、各氏に師事。大学在学時より、栗山文昭氏と藤井宏樹氏のもとで、合唱音楽についての研鑽を積む。第4回若い指揮者のための合唱指揮コンクール、ファイナリスト。Ensemble PVD、アンサンブル・サモスコスのメンバー。vie Souple、常任指揮者。明治薬科大学合唱団、副指揮者。現在、東京都私立中学・高等学校、教諭。

**高橋 克明** *Katsuaki Takahashi*

甲南大学理学部卒業。在学中にグリークラブに所属し、学生指揮者を務める。電機機器メーカー勤務。東京甲陵会合唱団は一時、活動停止中であつたが、2010年の活動再開にあたり団内指揮者に就任する。数十年前に学生指揮者だった頃の経験のみを頼りに活動を始めるも、「昔とった杵柄」ほど当てにならない物はない。時には団員からの鋭い指摘を受け、時にはピアニストからのご助言もいただき、時には迷走しながら、日々苦悩する。

ピアノ

**坂田 百合子** *Yuriko Sakata*

国立音楽大学音楽学部器楽科ピアノ専攻を卒業。イタリアでオペラ歌手の演奏旅行に同行するなど声楽・合唱の伴奏や室内楽とのアンサンブルを数多く手がけている。ピアノ、室内楽、伴奏法を高市貴久枝、岩崎淑、賀集裕子、チェンバロを新谷久子の各氏に師事。2014年より港区文化財団管轄のミナトシティコーラスの指導陣に加わり大友直人の指導を受けている。大阪男声合唱団とは10年以上にわたって関わっている。

**佐藤 香苗** *Kanae Sato*

東京音楽大学音楽学部ピアノ専攻卒業、同大学研究科ピアノ伴奏者コース修了。東京甲陵会の他、多くの合唱団にてピアニストとして活躍、女声合唱団の指導も行う。在学中よりアンサンブルに取り組み、演奏上不可欠なパートナーとしてのピアノを志し活動中。1995～97年イタリアのピエディルコ音楽祭にてソロ・室内楽に出演、研鑽を積む。1996年川崎音楽賞コンクール、最優秀賞・市長賞受賞。2009年チェンバロプレジャーにてグランプリ受賞。

プログラム

1st Stage

大阪男声合唱団

男声合唱による10のメルヘン『愛する歌』より

作詩: やなせ たかし 作曲: 木下 牧子

指揮: 甲和 伸樹 ピアノ: 坂田 百合子

誰かがちいさなベルをおす

ひばり

ロマンチストの豚

海と涙と私と

地球の仲間

さびしいカシの木



2nd Stage

大阪外国語大学グリークラブOB合唱団

ロシア民謡

指揮: 坂井 美樹

ともしび (ОГОНЁК)

ヴォルガの舟歌 (Эй, УХНЕМ!)

バイカル湖のほとり (ПО ДИКИМ СТЕПЯМ ЗАБАЙКАЛЬЯ)

赤いサラファン (КРАСНЫЙ САРАФАН)

カリンカ (КАЛИНКА)



3rd Stage

vie Souple

指揮: 石井 奈央

無伴奏女声合唱による日本名歌集『ノスタルジア』より

朧月夜

作詩: 高野 辰之 作曲: 岡野 貞一 編曲: 信長 貴富

里の秋

作詩: 斎藤 信夫 作曲: 海沼 実 編曲: 信長 貴富

村の鍛冶屋

作詩: 不詳 作曲: 不詳 編曲: 信長 貴富

女声合唱曲集『木とともに人とともに』より

悲しみは

作詩: 谷川 俊太郎 作曲: 三善 晃

めばえ

作詩: みずかみ かずよ 作曲: 木下 牧子



～ intermission ～

4th Stage

東京甲陵会合唱団

男声合唱組曲『光る砂漠』より

作詩: 矢澤 幸 作曲: 萩原 英彦
指揮: 高橋 克明 ピアノ: 佐藤 香苗

再会

恋の詩でも読んだあのように

早春

秋の午後

ふるさと

5th Stage

合同ステージ

男声合唱組曲『水のいのち』より

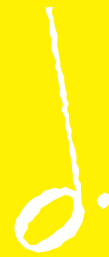
作詩: 高野 喜久雄 作曲: 高田 三郎
指揮: 小貫 岩夫 ピアノ: 佐藤 香苗

雨

水たまり

川

海よ



1st Stage

男声合唱による10のメルヘン『愛する歌』より

「それいけ！アンパンマン」の生みの親として知られている、やなせたかし(1919～2013)は、「アンパンマン」がヒットした時にはすでに70歳目前という、本人曰く「小器晩成」の漫画家です。当作のヒット以前には「手のひらを太陽に(1962年)」の作詩などで詩人として注目され、当時に書きためていた詩をまとめた詩集「愛する歌」第1～5集の出版によって、本職の漫画家よりも詩とその挿絵イラストを書く人として広く知られている時代が長く続きました。

やなせたかしにとって、詩とは子どもからお年寄りにまで多くの人に愛されるような、抒情性にあふれ、心によるこびをあたえるもので、本業の漫画と同一次元でとらえられる存在だったそうです。

作曲家の木下牧子は大学受験浪人中にこの詩集を書店で偶然に見つけ、受験勉強としての作曲とは別に自分自身の純粋な楽しみのため、十数編の詩に「うた」をつけて二部合唱にしましたが、その時点では一旦お蔵入りになったそうです。その後10年以上の歳月が経ち、音楽之友社の雑誌「教育音楽」に不定期で足掛け七年に亘って一曲ずつ掲載して行くという形で、以前に作った3曲に新たな7曲を加えた全10曲の同声二部合唱曲集として結実しました。学校教育用ということで比較的平易な旋律と和声の合唱曲ですが、世に浸透するにつれて歌曲や男声四部合唱用の楽譜が出版されるようになりました。本日は演奏時間の都合もあり、以下の6曲を演奏いたします。

1. 誰かがちいさなベルをおす (詩集 愛する歌 第1集(1966)より／「教育音楽」1990年7月号掲載)
2. ひばり (詩集 愛する歌 第2集(1967)より／「教育音楽」1990年4月号掲載)
3. ロマンチストの豚 (詩集 愛する歌 第2集(1967)より／「教育音楽」1989年4月号掲載)
4. 海と涙と私と (詩集 愛する歌 第4集(1970)より／「教育音楽」1994年8月号掲載)
5. 地球の仲間 (詩集 愛する歌 第2集(1967)より／「教育音楽」1988年11月号掲載)
6. さびしいカシの木 (詩集 愛する歌 第3集(1969)より／「教育音楽」1990年8月号掲載)

大阪男声合唱団

1954年大阪大学男声合唱団のOB合唱団として発足、1959年までは毎年現役合唱団の定期演奏会に賛助出演や合唱祭に参加をしていましたが、その後は20年余り休眠状態になりました。1982年から活動を再開しましたが1990年代の終わり頃から初期のOB達が戻り2001年7月大阪にて第1回定期演奏会を開催。2012年からは大阪・東京交互に演奏会を実施しています。東京支部合唱団は2001年に関東在住のOBで結成し、2018年8月現在20名で活動しています。



2nd Stage ロシア民謡

日本で「ロシア民謡」として受け入れられているロシアの歌には、古くから歌い継がれてきた「民謡」だけではなく、多くのロシア・ソヴェト大衆歌謡も含まれています。ロシア民謡が日本で広く歌われるようになった背景には、「うたごえ運動」と「歌声喫茶」の存在がありますが、日本語の訳詞も大きな役割を果たしました。日本語の訳詞を通じて、ロシア民謡が日本の文化に浸透していったともいえます。本日は5曲のうち2曲を原語で、そして3曲を原語と日本語で演奏します。

1. ともしび (ОГОНЁК)

楽団カチューシャ訳詞。恋人や息子を戦場に送りだす風景で、原語の「戦場へと娘は戦士を見送った」は、訳詞では、「雄々しきますらお 出でて行く」と戦争を想起させない表現に変えています。

2. ヴォルガの舟歌 (ЭЙ, УХНЕМ!)

純粹のロシア民謡。歌詞にくり返し登場する「エイ・ウフニェム」は、樹木の根を引き抜く時や、ヴォルガ河で舟を曳く時の掛け声。意味は、「エイ、掛け声をあげよう」。(ソロ：真鍋一史)

3. バイカル湖のほitori (ПО ДИКИМ СТЕПЯМ ЗАБАЙКАЛЬЯ)

中央合唱団訳詞。シベリアへの流刑者がバイカル湖を渡れば自由の身になれると歌います。訳詞では、「流刑者」が「旅人」となっていますが、「つな^{ひとや}がれし獄舎」と原詩に近い訳となっています。

4. 赤いサラファン (КРАСНЫЙ САРАФАН)

津川圭一訳詞。娘のために花嫁衣裳である赤いサラファンを縫う母親と娘の対話が、同じメロディの繰り返しなかで進行していきます。訳詞が原詩の内容と雰囲気^{はやしこば}を十分に伝えています。(ソロ：永谷勉)

5. カリンカ (КАЛИНКА)

カリンカとは赤い実を房状につける灌木カーリーナの愛称で、カリンカを花嫁に例えた婚礼の祝い唄。途中で歌われる「アイ リュリ リュリ アイ リュリ リュリ」は囃子詞^{はやしこば}です。(ソロ：五十嵐強)

大阪外国語大学グリークラブOB合唱団

大阪外国語大学グリークラブOB合唱団は、1998年に関東地区で、2001年に関西地区で結成されました。現在東京では約25名が小貫岩夫、坂井美樹両先生の指導の下で練習を行っています。我々の大先輩である清水脩の曲は本団にとって欠かせないものとなっているほか、創部以来歌い続けている黒人霊歌や世界の合唱曲も本団のレパートリーのひとつとなっています。一昨年には、国内外から80名のOBが結集し、外大グリークラブ創部90周年記念演奏会を大阪と東京で催しました。



3rd Stage

無伴奏女声合唱による日本名歌集『ノスタルジア』より他

無伴奏女声合唱による日本名歌集『ノスタルジア』より

「朧月夜」有名なメロディのヴォカリーズから始まり、その静かな余韻の中からアルトが歌い始めます。主旋律を彩る、春の宵の柔らかな風を思わせるヴォカリーズが印象的です。最後のソプラノは、空高く輝く月を表すかのようです。

「里の秋」ソプラノとメゾのカノンがduoのように始まります。曲が進むにつれてまるで秋の夜長に母親と子供が離れて暮らす父親を想いながら歌っているような、切なく温かい情景が浮かび上がります。

「村の鍛冶屋」tikitin...の軽快なリズムと音が鉄を打つ音と合いの手を思わせる多くの人に愛されている曲です。転調とテンポアップをキレよく決めるところは鍛冶職人ならぬ合唱人の腕の見せ所でしょうか？

女声合唱曲集『木とともに人とともに』より

「悲しみは」86歳になった現在も、作品を執筆し続けている詩人・谷川俊太郎の詩に、現代日本の合唱に多くの影響を与えた作曲家・三善晃が作曲をした女声三部の合唱曲です。

今年度、私たちはこの曲をコンクールの自由曲として演奏しました。

空間を漂うような「ゆ」のヴォカリーズ、フレーズによって様々に変化していく音色、複雑に重なる和音が、詩の持つ繊細さや感情のうねりをより深く表現しているように感じられる作品です。

「めばえ」1935年生まれ詩人・児童文学作家であるみづかみかずよの詩に、数多くの合唱作品で知られる木下牧子が曲をつけた女声四部の作品です。1997年度の第64回NHK全国学校音楽コンクール高等学校の部課題曲の為につくられました。寒い冬が明け草木が一斉に芽吹き始める様子が、4分の6拍子の悠々とした、且つ推進力のある旋律に乗せて歌われます。ハ長調のシンプルなハーモニーに聞こえますが、各所に非和声音が盛り込まれた技巧的なつくりになっています。

vie Souple

2015年に石井奈央のもとに結成された女声アンサンブルです。"vie" = 生命 "Souple" = しなやかにの意であり、しなやかな声・身体・感性を理想として、より豊かな音楽を追求しています。現在、演奏会、合唱祭・コンクール等への参加を中心に活動しています。春のコーラスコンテスト2016 クラシック・現代音楽部門女声2位。第73回東京都合唱コンクール 室内合唱の部銀賞。第19回かながわヴォーカルアンサンブルコンテスト女声部門金賞、総合4位。



4th Stage 男声合唱組曲『光る砂漠』より

矢澤宰（やざわおさむ・1944年～1966年）は、21歳で早世した詩人です。8歳の頃に腎臓結核に感染して幼少期から入退院を繰り返し、一時期は絶対安静となってベッドで寝たきりの日々を送っています。高校生の頃、病状は小康状態となり普通の生活をしていましたが、その後再発して入院。そのまま21歳で病没しました。中学生の頃から詩作を始め、亡くなるまでに多くの詩を遺しています。

組曲「光る砂漠」は、矢澤の遺族や関係者が出版した同名の遺稿詩集の中から、矢澤自身の人生に沿った9編の詩を選んで構成されています。今日は演奏時間の関係から、5曲を選んで演奏致します。

幼ない頃、通院を繰り返していたために友人もできずに一人で過ごすことが多かった中で、校庭の片隅で感じた秋の気配に自身の姿を感じた「再会」から曲は始まります。「恋の詩でも読んだあとのように」「早春」では、絶対安静となり病室の窓から四季を感じる中で、病気が治ることへの希望と、そんな日は訪れないのではないかという不安の間で揺れ動く少年の心情を描いています。

その後、退院して普通の生活を過ごしている中で、ふるさとの自然、何気ない日常の一つ一つに命を感じ、生きている喜びを歌う曲が続きます。本日はその中から「秋の午後」を演奏します。そして再び入院。自分が死んだあと、自分の命が故郷の自然を育む命の水になることを思い描き、故郷の自然の中で生きていきたいと願う「ふるさと」で締めくくられています。

明日、来月、来年、、私たちがあたり前のように在ると思っている未来。矢澤はそれが在ってほしいと願いながらも、在るかどうかわからなかった。少年の頃から常に「死」と隣り合わせで生きてきたにもかかわらず、死の恐怖や人生への絶望を感じる詩ではなく、むしろ死を感じながら生きてきたからこそ自然の一つ一つに命を感じ、命への希望を歌い、命への感謝を詩に綴っています。10代の多感な時期にそんな人生を送った矢澤の心象が少しでも表現できていれば幸いです。

東京甲陵会合唱団

神戸・六甲山の麓にある甲南大学グリークラブOBの関東在住者を中心に結成し、今年で19年になります。毎年の東京都合唱祭や現役との合同演奏会の他に、半世紀以上に亘って続けている学習院大学男声合唱団との交歓演奏会を中心に活動しています。また、最近では他大学のOBも一緒に歌っています。グリークラブは2021年に創部70周年を迎え、記念演奏会も予定しています。今後も気持ちはいつまでも現役で（気持ちと身体のズレがありますが…）、まだまだ元気に歌っていきます。



5th Stage

男声合唱組曲『水のいのち』より

この曲は1964年に初演され、以来50年以上を経ても日本の代表的な合唱曲の一つとして歌い継がれています。作曲された頃は高度成長期と呼ばれた時代でした。産業、経済が発展し、欧米の文化が若者を中心に浸透していった時代です。社会の発展は豊かさを人々に与える一方で、相反する頹廢的な文化ももたらしています。作曲者の高田三郎（1913年～2000年）は、そういった負の面を嘆き、それが「水のいのち」を作曲するきっかけとなったと語っています。また、「人の肉体はよいものであり、大切にされなければならないが、人にはまた精神というものもあり、その精神が賛成していなければどのような生き方をしても、満足することはできない。」「その『精神』に目と心に向けてもらうために」この組曲を書いたとも語っています。この曲は、単に水の一生を叙情的に描いた歌ではなく、私たちが「いのち」として持つべき精神のあり方の一つを示そうとした曲なのです。

「雨」では、地上の万物に分け隔てなく降り注ぐ雨が、枯れた井戸や踏みにじられて痛んだ芝生、今にも枯れそうな梢に再び蘇る「いのち」を与える水であることを歌います。そして、その雨が溜まってできた「水たまり」が「私たちに似ている」と歌います。私たちの深さは、水たまりの泥水ほどの深さでしかないこと。しかし、泥水であっても水面に空を映そうとする、憧れに向かって生きようとする「いのち」がその中にあることを歌います。

次に、溜まった水が流れ出す「川」の姿を描きます。山の高みや青空にあこがれながらも「低い方へ行くほかはない」現実。時には淵によどみ、渦を巻くような葛藤の中で流れてゆく川になぞらえ、私たち自身の姿を描いています。終曲「海よ」で水は海にたどり着き、その深い海の底でようやく、白い雪（マリンスノー）が「下から上へ」昇り始めるころへ出会います。新しい「いのち」を与えられ、憧れの空へ昇り始める「水のいのち」を歌います。

本日のメンバーは、この曲が作曲された頃に生まれ育った者が多くを占めています。それぞれの人生経験の中で感じ取ってきた「水のいのち」、生き方の「精神」が少しでも表現できれば幸いです。



出演者

大阪男声合唱団

T1：国分 和夫 高木 保 村田 洋一 寺尾 敏康 内田 裕樹
 T2：宇野 肇 富田 義人 江守 茂和 佐藤 圭司 岡部 寛正
 B1：福井 朗 高島 志信 奥村 秀策 石橋 博 池田 直昭 清田 展弘
 B2：木戸 啓喜 渡邊 史信 木田 英之 鈴木 啓司 甲和 伸樹 佐々木 泰介

大阪外国語大学グリークラブOB合唱団

T1：西村 信勝 板村 哲也 五十嵐 強 永谷 勉 片渕 明広 保川 一治 戸田 貴之
 T2：西沢 毅彦 赤城 一字 弥勒 誠之 竹尾 彰 加藤 直樹 杉本 啓一郎 稲積 和典
 B1：新出 武雄 西川 哲朗 浜崎 慎吾 岸本 保 松村 尚人 福田 洋之
 B2：大井 耐三 真鍋 一史 南 雄次 樽井 一仁 米野 勝 前田 芳秀 山口 伸

vie Souple

阿部 優紀子 石井 里子 尾崎 ゆりか 岸川 紗希 小池 菜月
 斎藤 里奈 新谷 祐美子 林 真澄 宮内 優里 矢田部 恵

東京甲陵会合唱団

T1：菅谷 昭人 松下 裕紀 太田 竹信 半澤 裕介 大前 靖彦 緒方 正裕 八幡 諭
 T2：酒井 裕 中平 悟 前田 淳造 松田 博義 深田 義則 高橋 克明
 B1：野本 良平 杉浦 康介 山田 紘士 加藤 利勝 木全 裕之 熊谷 隆
 B2：南波 展樹 古川 方理 道下 和輝 三上 翔



大阪男声合唱団

第19回大阪男声合唱団定期演奏会

2019年7月21日(日) 14:00開演

第一生命ホール(東京都中央区・晴海トリトンスクエア内)

出演：大阪男声合唱団

大阪外国語大学グリークラブOB合唱団

大阪外国語大学グリークラブOB合唱団合同演奏会

2019年秋(場所未定)

出演：大阪外国語大学グリークラブOB合唱団(大阪)(東京)(名古屋)

vie Souple

vie Souple 3rd Concert(仮)

2019年秋(場所未定)

出演：vie Souple

東京甲陵会合唱団

第34回甲南大学・学習院大学交歓合唱演奏会

2019年3月10日(日)

学習院創立百周年記念会館 正堂

出演：甲南大学グリークラブ、学習院大学輔仁会音楽部男声合唱団

甲陵会合唱団(甲南大学グリークラブOB会)、学習院OB男声合唱団